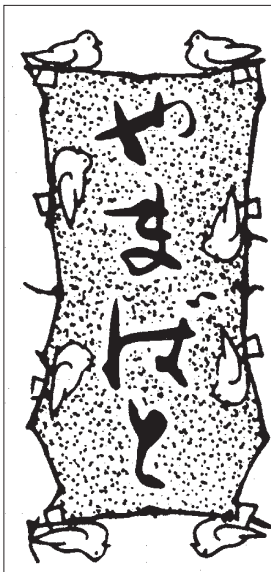


発　行
社会福祉法人 牧ノ原やまばと学園
〒421-0412 静岡県牧之原市坂部2151番地2
TEL:0548-29-0221 FAX:0548-29-0157
E-mail:honbu@yamabatogakuen.jp
http://www.yamabatogakuen.jp/
機関誌代は無料です。

わが涙、わが歌となれ

（一）

新型コロナウィルスが中国武漢で発生したのは、二〇一九年末ですから、本年で三年になります。感染力の強い恐ろしい病原菌として警戒されたコロナも、ワクチンの開発等もあって、かつてほどは緊張感・危機感をもたらすものではなくなり、社会のあり方も、「ゼロコロナ（コロナ撲滅）」から、「ウイズコロナ（コロナと共に」へ変わりつつあります。

そんな中、当法人においても、この七月末から九月にかけて、二つの入所施設、具体的には、地域密着型特別養護老人ホーム「グレイス」（定員二十九名）と、障害者支援施設「やまばと希望寮」（定員三十名）において、クラスターが発生しました。

クラスターとは、「共通の感染源を持つ五人以上の感染者の集団」と定義されています。グレイスでは、累計感染者数は、ご利用者四名、職員十四名となり、「希望寮」では、ご利用者三十名（全員）、職員十二名となりました。

職員が次々に感染し休まざるを得なくなる中、「働き手の確保」が最重要課題になりましたが、幸いなことに、法人内の他事業所から応援職員が派遣され、何とか乗り越えることができました。また、ほぼ全員がワクチン接種四回目を終えていたおかげで、重症化する人や亡くなる方が皆無だったのも有難いことでした。二つの施設ともすでに終息宣言を出し、今では、通常の生活に戻っています。

実は二月に、特別養護老人ホーム「聖ルカホーム」の「ショートステイ棟（短期入所者のためのユニット）」でも、ご利用者二名、職員三名のクラスターが発生したのですが、こちらは、短期入所の方々が対象だったので、可能な限り、早めに家庭に帰って頂くことも可能で、このような方法を通して、他のご利用への感染を防ぐことができたのでした。

それぞれ、タイプが違う施設においてクラスターを体験しましたので、これらについて関係者の間で検証し、より良い対応へつなぐことができますよう願っています。

（二）

さて、機関紙の外部原稿執筆者については、通常は、「あとがき」で簡単にご紹介していますが、今回は、あえて、この巻頭文の中でお伝えすることにしました。

執筆者の藤本律子さんは、今から四十年位前に出版された本、『わが涙、わが歌となれ』の著者、原崎百子（ももこ）さんのご長女です。この本は、四十三歳で召された原崎百子さんが、肺がんと診断されて以来綴ってきた日記を、夫の原崎清牧師が編集・刊行したものです。

後に残される夫と幼い子どもたちの幸せを心から願っている様子に心打たれますが、さらに心揺さぶられるのは、予期せぬ病により家族と否応なく引き裂かれる不条理を、あふれる涙で受け入れ、最終的には、生命を与えて下さった創造主に感謝し、「わが涙よ。あなたを賛美する歌とさせてください」と祈っている個所です。

肺がんの病状が進んで、歩くことも歌うことも、使徒信条を唱えることも出来なくなった日曜日に、彼女は、全存在をかけて、ひとり、心からの賛美を神にささげます。

（次のように記されています。）

わが涙よ　わが歌となれ
主をほめまつるわが歌となれ
わが病む肉体から発する

すべての吐息よ
呼吸困難よ
咳（せき）よ
主を賛美せよ
わが熱よ　汗よ　わが息よ
最後まで　主を
ほめ称（たた）えてあれ

あふれる涙の中で、神を仰ぎ、神に全存在をゆだね、神を賛美する姿は、私たちの心を衝（つ）きます。「わが涙よ、神を賛美する歌となれ」という言葉は、もともとは聖書から来ているようですが、私は原崎さんの本を読んで以来、『わが涙、わが歌となれ』が自分の好きな言葉の一つになりました。そして私自身の人生においても、涙を賛美に変えて下さる神の恵みを体験できたことを感謝しています。

「人間は健康状態にある時と同様に、病気の状態にあっても変わりなく、その使命をはたすことができる。神に仕え、他人のために役立つことができるのは、健康な時に限られると考えられているようだが、大違いである！むしろ正反対の場合が多い。キリストがそれまでで一番神と人とに仕えたのは、自分を殺そうとしている人たちを赦した、あの十字架上であり、死にかけている時であった。病人はだれでもこれと同じことをすることができる。……」

これは、文豪トルストイの言葉ですが、原崎さんの例からも、そうだなあと思わされます。

（二）

ところで私は、他人事（ひとごと）ながら、原崎さんのお子さんたちはその後どうなったのだろうと案じていたのですが、不思議なつながりの中で消息を知ることができました。

毎年、当法人を訪れ、成人寮の寮生さんや聖ルカホームのお年寄りの皆さんと音楽交流して下さるグループの中に『ＩＣＵ卒業生有志の会』がありましたが、その活動の初期の頃、率先して司会進行を担当し、楽しい交流の時をつくってくださった岩井マリ子さん（静岡英和女学院の英語の先生）が、原崎清牧師と結婚されることになり、百子さんの遺児たちの母親になることが分かったのです。百子さんとマリ子さんは、国際基督教大学の同期生とのことでした。

原崎清・マリ子先生は、私の夫の長澤が重い障碍を負う身になって以来、ときどき励ましのお便りを下さいましたが、ある時、私は、お二人がおられる「桑名教会」に招かれ「やまばと学園」のお話をしたことがあります。マリ子さんについて印象的だったのは、牧師夫人として、また、子どもたちの母親として、全力で喜んで尽くしておられる姿でした。

一方、『ＩＣＵ卒業生有志の会』に属する女性たちは、結婚以来、ほとんど外に出なくなり専ら家庭の仕事に専念しているマリ子さんに同情し、「可哀そう、これも、原崎牧師のせいだ」とか言って、嘆いたこともあったようです。

長い年月の間に、マリ子さんもご逝去。原崎先生とは年に一回、賀状をお送りするだけになっていましたが、今年になって藤本律子さんから「父が召されました」とのお知らせをいただいたのでした。

文面には、子どもたち三人で父の説教に耳を受けたこと、二人の母親に感謝している旨が記されていました。百子さんが病床で全存在をかけて神さまにゆだねたことが、このような形で実っていることに、私は感慨を覚えました

さっそく、律子さんに対して、「お二人のお母さんのこと、百子さんとマリ子さんのことを、原稿に書いてください」とお願いしたのですが、良い返事は得られませんでした。しかし、暫く経ってから、「母のことは書けませんが、たまたま父の机の中から、ピッタリの手紙が出てきたので、これをご紹介します」とのご返事。―

原崎先生のお便りは、長澤巌の人生を深い洞察力で綴ったもので、たいへん有難い内容でした。が、文末に私のことが書かれていたので、これには驚き、赤面し、困惑してしまいました。出来れば削除したかったのですが、そういうわけにもいかないので、お便りに感謝し、私としては、これからも自分らしく、あるがままに、しかし神さまの求めには素直に従って歩んでいきたいと思っています。

〈理事長〉　長沢道子

亡き父の手紙から

藤本律子

私の父、原崎清は、二〇二二年四月、九十歳で天に召されました。父は長沢巌先生の後輩で、牧師として生涯を全うしました

先日、偶然、父の引出しから一通の手紙のコピーを見つけました。二〇〇六年十月に父と亡母マリ子が、重度の障害を負われた長沢巌先生をお訪ねした後、父が出したお礼状でした。長沢先生はその後三ヶ月足らずで召天なさいましたので、この時、両親が先生にお会いできたのは幸いなことでした。その日の感動を父はこう綴っています。

・・・私の生涯の恩師は鈴木正久先生と井上良雄先生ですが、心底から敬愛し、こんにち迄その存在に圧倒され続けてきたお方として、今一人、長沢巌先生があります。私はこの五十年余、鈴木・井上両先生のことを思わない日は殆ど一日とてなかったと言って過言ではない程、両先生は常に心の支えであり、確かな道標でありました。私の座右の言葉は「全き人に目をそそぎ、直き人を見よ。」（詩篇三十七・三十七）ですが、両先生は私にとり文字通り、主にあって「直き人」であり、したがって私のような便々たる生涯を生きてきた者にとっては、お会いすることが怖くて、鈴木先生の場合、病床に、卒業以来ただ一回の訪問。井上先生は数回お訪ねしたとは言え、その都度帰宅して冷汗が出る私でした。

同様に、私にとって「直き人」そのものであられる巌先生も、怖さが先立って、とうとう今日に至りました。今回、やっと思い切ってお訪ねしたわけですが、先生はこの上ない優しさをもってお会い下さいました。私はこの日を生涯忘れないでしょう。

巌先生の著書『目標をめざして』の副題は、「祈り、働き、ゆだねる」とあります。思えば、誕生から神学校卒業までの二十八年間は先生にとり、ひたすら「祈り」の歳月でしたし、卒業後からご発病（手術）までの二十八年間はひたすら「働き」の歳月、そして髄膜種摘出手術後今日に至る二十三年間は、ただ全く主に「ゆだねる」歳月でした。私は今、この不思議に圧倒されております。

これは主がなされたことで、わたしたちの目には不思議に見える。（岩波訳では「ただ驚きである」）（マタイによる福音書21・42）

カール・バルトは和解論の「倫理」で、キリスト者の生の頂点を「主への従順」であるとし、その従順は「神への呼びかけ」に究まるということを明らかにしました。

悩みの日にわれを呼べ
我なんじを援（たす）けん
而してなんじ我をあがむべし
（詩篇五〇・十五）

あの日、私が先生を前に感じたことは―今、先生は頭ではなく、心でもなく、信仰ですらなく、それらすべてを含み込んで先生の「存在全体」で、「存在そのもの」で、神様に己れをゆだね、神様を呼び、ただそのようにして神様の恵みをほめたたえていらっしゃる。いや己れ自身のみならず、これまで祈り、働いてこられたお働きの一切をも神様にゆだね、神様に向って呼んでいらっしゃる―このことでした。

「わたしたちはいつか、何もできない時が来るでしょう。そんなときでも祈ることができますならば、それは最善の奉仕というべきです。しかし祈ることもできない時がきます。そのことをあらかじめ知って、わたしたちは自分自身を神に任せたいと存じます。」（『目標をめざして―祈り、働き、ゆだねる―』）

こう書かれた先生は、翌年、髄膜種摘出手術に臨まれ、多くの人々の祈りと期待にもかかわらず、心身に重い障碍を負う身になりました。

先生の手記を読むと、ご自分の生涯を驚くべくさやかに見通しておられたようにも思えるのですが、それは、ご自分とそのお働きの一切をゆだね切っている人にのみ、主ご自身がお示しになった想像を絶する洞察だったのでしょうか。

心に涙が溢れます。

最後に、道子先生について。

主イエス・キリストが私たち人間をご自身の真の「パートナー」として選び、仕え、共にあり、そして救って下さったように、正にその証し・写しとして道子先生は、巌先生の真のパートナーとして、更にはまた牧ノ原やまばと学園のすべての人達の真のパートナーとして、ご自分を献げ尽くしてこられたし、今も献げ尽くしておられます。その道子先生の存在は、私にとっては、言葉の最も真実で豊かな意味において「稀有（ゆう）」なものと写ります。感謝です。先生のご健康の上に切に神様のお支えを祈らずにはおれません。・・・

二〇〇六年に書いたものですが、まことに父らしい手紙だと思います。

私もまた、祈り、働き、ゆだねて生きていきたいと願ってやみません。

インドネシアから日本へ

セプティアニンティアス

聖ルカホームで働き始め、一年二か月が経ちました。私はＥＰＡ13期生です。ＥＰＡを利用するにあたり、色々な心配はありましたが、政府間同士のプログラムでサポートがあるので安心と思いました。日本に来る前に6か月、日本に来てから6か月、日本語を勉強しました。

3年前にやまばと職員がインドネシアに来て施設の紹介をした時、聖ルカホームでは1か月に1回礼拝を行っていると聞いてここを選びました。

聖ルカで働いてみて大変なこともあれば、楽しいこともあります。移乗や不穏時の利用者様への声掛けの対応がわからない時や利用者様の質問の意味が分からない時があり、大変です。でもわからない時は周りの職員さんに聞いて教えてもらっています。利用者様も職員もみんな優しく、利用者様が若い時の話や戦争体験など色々な話をしてくれるので楽しいです。

インドネシアは広くて、島がたくさんあります。島によって言語も違います。私はジャワ島からきました。海が近いので海を見ていることが好きです。インドネシアにいる時は看護師、会社員として働いていました。現在、理事長宅で暮らしていて、理事長も優しく、生活にも慣れてきましたが、初めはゴミの分別に戸惑ったり、インドネシアにはあまり自動販売機がないので使い方に戸惑いました。ホームシックになることもあるけれど海が近く空気も綺麗なので時々海岸に行き、海を見て楽しんでいます。今は12月にＥＰＡ生が来ることが楽しみです。

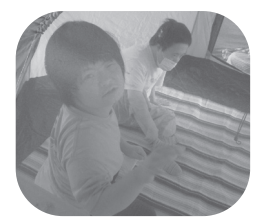
（この記事は、編集員二名がインタビューした内容をまとめたもの。はにかみながらもしっかりと自分の言葉でお話する姿が印象的でした。なお、セプティさんは日本語能力試験Ｎ2に合格したとのこと。すごい！これからも頑張ってください。）

（取材者）桑原裕子・柚原史織

キャンプ体験

ケアセンターマーガレット　杉本美咲

コロナ禍の昨今、〝グランピング〟〝ソロキャンプ〟といったアウトドアが流行しています。私自身、テントの組み立て方は知りませんし、ポップアップテント一つ収納するにも苦戦します。いつかはキャンプに挑戦してみたいと思っています。



そんな中、非日常的な体験をして欲しいと、私たちマーガレットでは、今年初めて「キャンプ体験」を行いました。

外は生憎の雨で、室内での開催になったのですが、キャンプを趣味とする施設長よりテントやタープをお借りして、ご利用者と一緒に組み立て、中に入ってみました。少し薄暗いテントの中は、妙に居心地が良く、寝転ぶ方、正座して頭上を見上げてみる方…過ごし方は様々でした。テント越しから見る外の世界がどの様にご利用者の目に映っていたのか想像するだけでもワクワクします。又、床に敷いていたブルーシートを見て「キャンプと言ったらバーベキュー！魚釣りをして、バーベキューをやりましょう」と創作活動で作った魚釣りゲームを開始。あっという間に〝マーガレットキャンプ場〟が完成しました。

体験が終わる頃には、ご利用者からは「楽しい」「もっとやりたい」、更にスタッフからも「次は外でコーヒーでも飲みながら」と次のアイデアが自然と出て来ました。

マーガレットのスタッフは、アイデア達人ばかりです。「マーガレットに来るのが楽しい！」と感じて頂けるようこれからもご利用者、スタッフ皆で行事を楽しんでいきたいと思います。

（生活支援員）

しまトレ始めました～

ワークセンターあさがお　榛地裕子

『しまトレ』とは、「島田市のトレーニング」の略語。現在、市内で地域住民たちが自主的に行っている、健康増進、介護予防のための体操教室を意味します。

始まりは二年前、初倉の包括支援センターの職員の方から「施設の利用者さんの活動として始めてみませんか？」と提案されたことでした。ちょうど施設も新しくなったし、地域の人たちにあさがおを知ってもらう良い機会ではないかと思い、地域貢献事業として企画書を作り、決裁してもらいました。関係者と小会議を何度か重ね準備してきましたが、その頃から新型コロナが猛威を振るい始め、なかなかスタートを切ることができませんでした。

紆余曲折しながらも念願叶って、今年度五月十四日（土）にめでたくスタート。実施に当たっては井口地区の自治会長さんが大変尽力してくださり感謝しています。この地区には「井口かわら版」という地域の情報紙がありますが、そちらでも取り上げて頂きました。

五月にスタートしてから前回（九／三）まで14回で、延べ328人（平均23・4名）の方々が、あさがおしまトレに参加してくださっています。日中参加のご利用者たちと地域の人たちとが交流する場にもなっています。誰も来なかったらどうしようという心配もありましたが、今では毎回二〇名以上の参加があり、私も皆と一緒に体操を楽しんでいます。（施設長）

垂穂寮改革委員会について

垂穂寮　大畑彰弘

二〇二二年三月から、垂穂寮は法人本部の設置した「垂穂寮改革委員会」のもとで、改革を進めています。その理由は、二〇一六年七月に虐待事件が起きましたが、それ以降も不適切なケアの発生が止まらないことから、事業所運営と改革を法人本部と一体となって進めることになったためです。

委員長は法人理事の佐々木炎氏、委員に垂穂寮のリーダー職員11名というメンバー構成です。加えて、静岡福祉大学の木下寿恵教授と当法人就労支援部門の河本敦子部長にグループアドバイザーとして補佐をお願いしました。

委員会活動は、毎月の定例会に加えて、（A）～（D）の4つの小グループ活動から成っています。これらの小グループは、委員会発足直前に全職員に対して行ったアンケートの結果をもとにしたもので、（A）人材マネジメント・人材育成、（B）ケアの質に関するケアマネジメント・業務改善、（C）職員間のコミュニケーション・職員関係推進、（D）設備の改修等の環境整備の4つの課題解決のため、努力しています。

発足から5か月、職員アンケートや法人本部への活動報告を重ねながら、現在は、支援スキルの向上研修や排泄業務の見直し、バースディカードの配布やトイレなどの設備改修プランの作成など、その取り組みが一つ一つ形となり、実行に移され始めています。

三月九日第1回会議が始まった時、佐々木委員長の下、メンバー皆で次の目的を確認しました。「当事者の意思を確認し、想いや希望、可能性に添った根拠あるサービスを、チームで提供する」事業所になること。現在、法人理念や行動指針、そして最新の福祉理念や価値、技術を確認しながら、委員会活動が進められています。虐待・不適切なケアが起こらない事業所を目指して。（施設長）

歩みのあと

（7月1日～8月31日）

●全体的なこと　（）は実施日

▼法人研修新入職員研修　吉浦輪先生「利用者に係る事例検討会」36名参加（7／8）

管理者研修　田島誠一氏「経営に対する基本姿勢①」グループ発表。24名参加（7／26）管理者研修　田島誠一氏「経営に対する基本姿勢②」Bグループ発表24名参加（8／23）

●個別のニュース

〈法人〉坂部サロン参加者の送迎／ハイナン自動車学校主催の静波海岸清掃にご利用者それぞれ1名、板倉事務局長、関根が参加。大原簿記専門学校生との交流もあった。（7／14、22、28）島田地域自立支援協議会に理事長が参加。（7／5）十字の園評議委員会に理事長が参加。（7／8）（リモート）日本キリスト教社会事業同盟研修会に理事長が参加。（7／8）（リモート）JAハイナン様よりお茶の寄贈。（7／20）牧之原市企業研究会に板倉事務局長が参加。（7／29）

《垂穂寮》新型コロナワクチン接種（4回目）を実施。（8／4、25）遊びとリハビリを合わせた遊びりテーションを開催。多くの利用者様が参加し、身体を動かし楽しい時間を過ごしました。（8／11）

《みぎわ》避難訓練を実施（5／8）ご利用者のミーティング（5／28）連休の昼食に外部のテイクアウトメニューを注文、ご利用者に休日を楽しんで頂いた。（5／6、7）

《野ばら》エンジョイプランで、ご利用者2名と職員2名が、御前崎へ外出。（5／26）

《やまばと希望寮》コロナ感染症対策の動画を観覧。ゴーグル・マスクの重要性、ゾーニングの仕方、濃厚接触者の待機について学ぶ。／セラピーボールでご利用者の笑顔が弾む。（7月）／安否コールの活用で、タイムリーに情報共有ができるようになった。（感染状況の周知、感染対策訓練等に活用。）台風の被害なし。（8／13）

《わかば・もくれん》職員とご利用者でコーヒーゼリーとわらび餅を手作り。美味しくできてみんな満足。（7／9）

《花もも》習字クラブ。絵の具と墨汁でご利用者が思い思いに言葉や絵を描きました。手ぬぐいで夏らしい作品を完成。（7／11）犬好きのご利用者の誕生日に、犬の縫いぐるみを使った手品を行う。その後はアイスをトッピングしたかき氷を頂く。（8／19）

《カサブランカ》午後の休憩時にはアイスを頬張り、みんなで熱中症対策を実施。（7月）

《希望の家》受託作業先が花火製造についてTV放映され、自分たちが行っている作業品がどのように作られているのか、視聴。作業のモチベーションアップに繋がった。（7／15）歯科衛生士さんに来ていただき、歯の状態や歯の適切な磨き方を教えていただく（7／21）

《ふれあい》近隣の歯医者さんに来ていただき、歯の状態を診ていただく（7／20）玄関に行を置き、それぞれの願いをこめた短冊を飾り付け。「仕事がたくさんきますように」「家族が健康でありますように」ひとりひとりの願いが叶いますように☆（8／5）

〈なのはな〉交通安全教室（交通指導員の講話と実践で交通ルールを学ぶ）（7／22）家で実践できる昼食作りとレクレーション（横井町公会堂にて）。洗わなくても良い野菜・レンジ・オーブンを使って簡単調理を楽しむ。午後は釣りゲーム・輪投げでチーム対抗戦を楽しみました。（7／28）

《あさがお》トーンチャイムの体験やキッチンカーでの初めての買い物を通じてご利用者、保護者、職員共々楽しい時間。（7／11）

《WOCやまばと》お菓子作り。ご利用者の楽しみが増えました。／納涼会で調理クラブが、そうめん・かき氷を作り、皆で楽しみました。（7月）移動図書を利用し余暇時間に読書。／お楽しみ給食でサンドイッチを美味しく頂く。／職員がサポーターズカレッジに参加。研修内容は「知的障碍者を中心にご利用者とのコミュニケーションを学ぶ」（8月）

《コスモス》島田市健康づくり課から講師を招き感染症講座。真剣に聞き入りメモを取る方々が見られました。（7／15）毎日暑い中、作業に励んでいるご利用者のために、かき氷を提供。好みのシロップを選んでもらい、みんなで涼みました（8／12）

《かたくりの花》納涼祭。炭坑節が流れるとご利用者がリズムに合わせて体を動かしたり、和太鼓を叩き賑やかでした。お昼は流しそうめん。クッキング、リフレクソロジー、誕生日会を実施。（8月）

《さくら》七夕飾り。短冊に書かれたお願いごと「友達の病気が良くなりますように」「決められたことを守れるようになりたい」「孫のサッカーチームが勝ちますように」等々、皆純粋です。（7／7）

〈さくら／マーガレット／レタス〉3名が掛川の「22世紀の丘公園」、「さすが市」に外出し、お土産とお弁当を購入。お弁当の種類が豊富で選ぶに迷っていました。帰りは新金谷に寄り、SLを見て、大満足。（7／14）あつまリーナ夏祭り、コロナ感染拡大で開催方法を検討し、各事業での分散開催となりましたが、好評の「かき氷」は美味しくいただき、笑顔の夏まつりに。（8／5）

〈生活支援センターやまばと〉50年記念誌の読み合わせから理念の継承を図っています。（7月）

〈聖ルカホーム〉ラーメン、チャーハン、餃子のテイクアウトを提供しご利用者に喜んでいただく。誕生日にデザートを作って、みんなでお祝い。移動販売車〝とくし丸〟での買い物を楽しんでいただいた。（7月）

《グレイス》垂穂寮から入居されたご利用者のたってのご希望で、垂穂寮を訪問。皆さんから大歓迎され、久しぶりの昼食もいただいて笑顔が絶えない一日となりました。（7／12）

《相寿園》近所の花屋さんが、月下美人をくださり、見せ場の午後7時頃から、少しずつツボミが開き始めて午後9時30分に見事満開。そしてゆっくりと閉じました。皆で一夜限りの夢を見ました。（7／3）初めての「口腔ケア」。保健師と歯科衛生士により、口腔チェック。「良く磨けていますね」と褒められる方やそうでない方も。「口腔ケアは肺炎の予防にもつながる」というお話に皆真剣になりました。（8／23）

《ぎんもくせい》3年ぶりに大運動会。ご利用者もたくさん運動できて楽しそうでした。（5／19）

《真菜》七夕飾りと七夕ゲーム（天の川対決おじゃみ投げ）。（7／1～8）枝豆をつぶしたずんだ餡でずんだクリームあんみつを作りました。とても好評でした。（8月）

〈すずらん〉日ごろの感謝と親睦を深めるため、おやつバイキング。（7／7）

《オリーブ》市による活動評価ヒアリング。（2／14）県の業務評価研修。（2／16）業務委託方針説明会。（2／21）

〈ぶどうの木〉ミニチュア傘のモビール作り。色とりどりの傘がゆらゆら揺れて可愛らしく仕上がったので展示。（7月）

ボランティア活動

★活動者名（敬称略、順不同）

個人　内藤きせ、松浦愛子、大川原富美子、鈴木展行、鈴木武之、井部博美、殿村隆夫、大塚、小嶋、橋本、鈴木波瑠七、高木星鈴、岩倉正豊、田平雅明、小松原美智代。

団体　岩本造園（草刈・除草・剤散布）、JA婦人部どんぐり（ウエス切り）、日赤奉仕団（ウエス裁断、清拭縫い、スリッパ・車椅子清掃等）、さくら会（ゴミ出し）、島田看護学校。

あとがき

☆表紙の写真は、ワークセンター希望の家のご利用者。恒例となったボッチャ大会での元気いっぱいな選手宣誓の姿です。

☆藤本律子さんについては、巻頭文をご覧ください。

☆コロナと猛暑により自宅にこもりがちですが、これからはできるだけ外に出ることにしました。皆様も、秋を満喫する日々でありますように。〈I〉

寄付金状況報告　（単位：円）

	寄付金	指定寄付金	合　計
4月～7月	2,015,822	0	2,015,822
8月	343,700	0	343,700
計	2,359,522	0	2,359,522

※2022年度より、機関紙代収入は計上していません。すべて寄附金収入として、計上しています。